目次

◇午前二時前の作品
雨上がり　1
記憶を失くした青年が脱出するだけの話　3
水面に浮かぶ　6
◇ラピラの作品
ストレイ・シープ　15
◇あとがき　22

雨上がり

午前二時前

道の端のアスファルトの窪みに溜まった雨水の上を、数人の子供がはしゃぎながら飛び越えていく。さっきまで降り続いていた雨はすっかりやんでいたが、あちこちに残った水たまりはしっかりと先程までの天気を主張していた。

徐々に日が傾いて、辺りに薄く闇が広がる時間。人の流れを横切ってこちらにやって来る君の手にある袋の金魚が、交差点の喧騒に怯えたように忙しなく動き回る。ふと、薄闇でも映える淡い水色の浴衣が、前を横切る女性の団体に埋もれた。

ぱっと頭上の街灯が灯る。しかし君を含めて、俺の周りの人間はそのことに気を取られることはなかったらしい。数秒前と変わらないテンポで人の波は流れていく。

そんな人の流れに目を奪われている隙に、君の姿を見失ってしまった。しまった、人混みに流されてしまったのか、と慌てて立ち上がり、目の前の流れに沿って急ぎ足で歩く。そうこうしている内に完全に日が暮れていた。気付いた瞬間に狭まる視界。途端に暗くなった周囲に視線を巡らせると、少し先の開けたところに見覚えのある水色の浴衣を捉えた。

急いで駆け寄ると、君は安心したように笑う。いま立っている地面はしっとりと湿った土だ。しかも、水たまりの側に立っているから、正直、浴衣の裾が濡れないかとすごく心配になってしまう。

付近に設置されているらしいスピーカーから、女性の声が花火の打ち上げを告げる。
君が小さく歓声を上げて空を仰ぐ。俺も花火が上がる方向に身体を向けた。楽しみだね、と後ろに声をかけたが、返事はなかった。妙な不安に襲われて、俺が背後を振り返ると――
――そこに、彼女の姿はなかった。
ただ、波紋を広げる水たまりがポツンと存在していた。俺が息を吸い込むのと同時に花火が打ち上がる。ヒュウッと細い音が聞こえて、パンっと雨上がりの夜空に大輪の花火が咲いた。

「レイ、ニー？」

咲き誇る光を背に、俺の呟きは誰にも拾われることなく消えた。

記憶をなくした青年が脱出するだけの話

午前二時前

何かが抜けてしまったような朝だった。

それは、魂かもしれないし、記憶かもしれない。もしくは人、だろうか。

青年は、それらの可能性を一通り並べた上で、そのすべてだろう、と判断した。根拠はない。ともかく、青年の頭の中のどこを探っても、エピソード記憶と呼ばれる、俗にいう「思い出」が欠落していることは紛れもない事実であった。それを知っても、青年に焦りだとか、不安だとかは今のところでてこない。大方、寝起きで頭がぼうっとしているせい、と思うことにした。

ベッドから這い出て、改めて部屋に視線を向けてみる。

二人くらいなら食事ができそうなくらいの小さな木製のテーブル、なにやら雑多な本や半透明のファイルに挟まれた紙束、それらが詰め込まれた大きな本棚、そこから溢れて山積みにされた分厚い書籍の隣には少しつぶれたソファ。それと、自分の寝ていたベッド。

この狭い部屋に確認できるすべてだった。生活感はないが、しかしここには人が住んでいると確信できる部屋だ。何がそう思わせるのだろうか、わからなかったけれど。

ふと、青年の目が本棚に向かう。半ば無理やりに詰め込まれ、今にもバサバサと落下しそうな本の群れの中に、違和感を捉えたのである。

目的の違和感に近づいた青年は、もう一度、深くそこを注視してみた。だが、違和感があるほかに何かを見つけることはできなかった。青年は視線をはずして、今度は右手の指を本にかけた。ぐっと自身のほうへ腕を引けば、予想していたよりもさらに軽い感触が伝わる。あ、と零した瞬間、手に取っていた本の両隣から、音を立てて、分厚い書籍の数々が絨毯の上に着地した。

すっぽりとそこにだけ長細い空間を開けた本棚に、青年は違和感の正体を発見した。スラリとした薄いフォルムは、飾り気のないグレー。ちょうど足元に広がる本を二冊、横に並べた程度の大きさをしている。そして青年は、この機械を知識として知っている……ノートパソコンだ。本の向こうに隠れて（隠されて？）いたノートパソコンは、青年が本をどけたことで、こちらにその折り目の見える方を見せて横たわっていた。

これが本棚の壁と本の間に挟まって、違和感――本が少し前へ飛び出していた――をうみだしていたのだろう。青年は安堵したようにひとつ息を吐くと、ノートパソコンを本棚から取り出す。そのまま足元に置こうとして、動きを止める。再び部屋に視線を巡らし、小さなテーブルに、ことり、とノートパソコンを置いた。

本棚の周りに散乱した、分厚い本を一冊拾う。何気なく表紙を見ると「Memoria（記憶）」と綴られている…その下の著者名を視認した途端、ずき、と頭のどこかに痛みが走った。

目の前が切り替わり、何か、映像のようなものが映る。

どこか薄暗く、狭い部屋。低い視点から見上げるのは、机に向かう誰かの後ろ姿――これが誰か自分は知っているはずだ――はっ、と意識が浮上する。うたたねから不意に目覚めたときのような感覚だった。靄がかかった様だった脳が次第に鮮明になっていき、周囲の温度が自分の感覚に戻ってくる。

「……名前だ」

再び本に視線を戻し、タイトルの下にある文字を読む。すんなりと馴染む名前だ。かつて何度も何度も口にした言葉は、文字列は、青年の中になんの突っかかりも残さず染み込んでいく。

持っていた本の表紙を捲る。現れた白紙のページを捲ると、表紙にもあったこの本のタイトル、「Memoria（記憶）」。そして著者名。もう一枚ページを捲ったところで、先程の頭痛が襲ってこないことに気づき、知らずのうちに強ばっていた身体から力を抜く。パラパラと斜め読みしていると、記憶喪失の青年の観察をしている科学者の視点で描き出されるストーリーは、小説というよりは、どちらかといえば研究過程をまとめた日記か論文を読んでいる気分になった。しかし、淡々と科学者が自分の心の内を吐露する場面で、青年の手は止まった。

白紙、だったのだ。

最後までページを流して見ても、まっさらのページが延々と続くだけで、そこにはひとつの文字も見当たらない。

青年は、その本を小脇に抱え、床から鮮やかな写真が表紙に詰まっているものを取り上げた。まじまじと表紙を眺めながら、自分はこの風景を知っているのだろうか、と考える。悲しみのような息苦しさが青年の心にのしかかった。

END?

水面に浮かぶ

霧と、雨と、月光と、

少しの幸せと、沢山の寂しさに包まれて、

眠る。

霧に揺らめくオレンジの街灯、

雨に浮かび上がる子供、

夜を告げる、青白い月明かり。

きっと、

この街が、夢が、

目覚めることはないのだろう。

午前二時前

「コーヒーのおかわり、いる？」
昼時になって騒がしくなった店内を眺めていたら、不意にカウンターの向こうから声をかけられた。ゆっくりそちらを振り返ると、このカフェのマスターが珈琲の入っているのであろうポットを軽く振りながらもう一度、
「コーヒー」
と問いかけてくる。
「……ください」
と短く答えて、指で白い陶器のカップを少し、向こう側に押した。そのカップがヒョイと持ち上げられる。つられるように顔を上げれば、マスターが慣れた手付きで珈琲を注ぐのが見えた。ふわりと香ばしい香りが漂う。
マスターの手が降りてきて、かちゃん、とカップが定位置に戻る。お礼を言って、再び満たされた黒いそれに口を付けた。珈琲の味に詳しいわけではないから、細かい感想を述べることはできないが、ここの珈琲が美味しい、ということだけは分かる。
一口飲んでカップを下ろしたところで、珈琲の横に皿とフォークが置かれた。チーズケーキと、その隣にちょこんと数切れのフルーツが添えられている。
「常連さんサービスだよ。昨日の夜作ったんだけど食べきれなくて、常連さんに出してるんだよね」
「ワンホールくらい食べられると思ったんだけど」そう言って頬を掻く彼。
「……歳ですか」少しからかってみようか、そう思ってポツリと呟く。
「たぶん、貴方とそう変わらないんじゃないかな」
「まあそうですよね。あ、ケーキいただきます」
「はいよ、召し上がれ。でも、もしかしたら貴方のほうが年上かもしれないな」

「そうですかね……むしろこちらからしたら、マスターのほうが年上に見えますが」
言葉を返しながら、フォークを綺麗な二等辺三角形にカットされたチーズケーキの先端に入れる。一口サイズになったケーキを口に運ぶと、まろやかなチーズの味が広がった。程よい甘さが心地よくて、あっという間に半分以下の大きさになったケーキを見て、少し寂しい気持ちになる。
ケーキを食べる手を休めて珈琲を啜っていると、またカランと出入り口の扉のベルが軽やかな音を立てる。マスターの落ち着いた声が新たな客を出迎える。
少しすると、鮮やかな赤色が視界の端に映る。そちらを振り向くと、ちょうどひとりの男が席に着いたところだった。その手には畳まれた赤いレインコートがあって、乾いた床にひとつ、ふたつ、水滴を落とした。どうやら外は雨が降り始めたらしい。
マスターに一通りの注文を伝え終えた男は、こちらが見ているのに気付いたようで、鮮やかな笑顔で話しかけてくる。
「こんにちは！今日も、探し物してる？」
「……こんにちは。今日はこれから、街を歩いてみようかと。さがすものは、たくさんありますから」
「ふうん。まだ見つからない？」
「……はい」
「それじゃあ、探すの、手伝ってあげようか！」
朗らかに笑って提案する赤色レインコートの男。
「そうですね。……次の目的地はどこですか？」
その提案に問いを返すと、彼は少し思い出すような素振りのあとで、
「次はベーカーのほうだから、西に行くよ。出発は明後日」

と答える。
ベーカー通りといえば、彼のお得意様がいるんだったか、といつかに教えて貰った情報が脳裏に閃いた。そして、まだ西に行ったことはないということも。
カウンターの向こう奥から聞こえる、規則正しい包丁の音に耳を傾けながら、しばし考える。明後日以降の数日間の予定の有無を確認して、結論を出した。
「ご一緒しても、いいですか？」
「もちろん」
と彼は答えて、
「いつもみたいに荷物と一緒に乗ることになるけど、いい？」
と付け足した。この質問もいつもどおり、なので間を開けずに頷く。
「了解！なら、明後日の朝にこのカフェにいてね。ここで朝ごはん食べて出発するから。……ねーマスター。聞いてた？」
にっと彼は笑って、その視線を前に向けた。その視線の先、カウンターの向こう側には、いつの間にかマスターが立っていて、湯気を立てるティーカップを隣の彼の前に置きながら苦笑いのような表情を浮かべてひとつ頷く。ティーカップを置いた彼は直ぐに奥に戻り、調理をする音が、先程より落ち着いた喧騒の隙間に再び流れ始める。
少しの沈黙。ふと、ミルクティーの入ったカップを両手で包み込むようにして持って、じいと淡褐色の水面を見つめていた彼が口を動かした。「ちょっと気になったんだけど」と前置きして続ける。

「きみは、なにをさがしてるの？」
「それが……」
……覚えてないんです。
出掛け先で幾度となく投げかけられた問いに答えようとして、口を閉ざす。すっと周囲の温度が冷めていくような気がした。
――自分はなにを、さがしているのだろう？それは本当に記憶にないものなのだろうか？改めて考えてみると、分かるのではないか……
「……ごめん。なんか聞いちゃダメだった？」
思考はそこで遮られた。相手が急に黙りこんで心配になったのか、彼が隣からこちらの顔を覗き込んできた。ルビーみたいに光る瞳と視線がかち合う。徐々に周囲が温度を取り戻していく。
「……いえ、そういうわけじゃないんです。気にしないでください」
返事をしつつもどこかぼんやりとする頭をどうにかしようと、まだ手元のカップに残ったままの珈琲を一口飲んだ。珈琲は冷めきってしまっていた。

石畳の端々まで裾を広げた霧が街灯に照らし出されて、細やかな粒子を浮かびあがらせている。
昨日、珍しく夜になっても降り続いた雨の名残の水たまりを踏む足音が、霧で白く覆われた視界の向こうから聞こえてきた。水の跳ねる音はどんどんこちらに近づいてきて、パシャンとすぐ横の水たまりを通って去っていく。振り返っても、確かにすれ違ったはずの人影は見えず、水面に残った波紋と遠くなる足音だけがその存在を主張していた。

角を曲がると、街灯とは違う光がぼうと辺りを染めているのが見えた。大きく切り取られた窓から漏れ出す照明が霧に反射しているのだ。決して太陽にさらされることのない街は依然として眠り続ける。欠伸を噛み殺すこともせず歩を進めると、オレンジ色にぼやけていた建物の輪郭が少しずつ鮮明になっていく。

たどり着いたそこの扉を開けると、カランカランと軽やかなベルの音。一拍遅れて、カウンターの奥から少し眠たげな落ち着いた声が、

「いらっしゃい」

と響いた。

いつも座るカウンター席に腰を下ろし、隣の彼に目を向ける。いつもの賑やかさの消えた彼は赤いレインコートを抱えて、焦点の合わない瞳でミルクティーを見つめていた。時折ゆるりと瞬きをしては思い出したように深く呼吸する。これが考え込んでいるときの彼だと気付いたのは、いつだったか。声をかけると、彼はぎこちない動きでこちらを振り向く。

「また考え事ですか」

「……特に何か考えてるわけじゃないよ。おれは無音を聞いてるの」

でも考えはまとまるよね、と笑ってミルクティーを一口飲む。集中しているときは誰でも、周りの音が聞こえなくなるものだと思うのだけれど、彼からしてみればそれは〝無音を聞く〟ということなのだろうか。彼の感覚で言うと、集中するということは、無音を聞いているうちに考えがまとまっていること、なのかもしれない。

ポツポツと会話をしていると、目の前にマスターが音もなく現れて、珈琲を出して奥へと戻っていった。熱いブラックコーヒーを一口。目が覚めるような苦味と、少しの酸味と、独特の香りが広がって、早朝のぼうっとする頭を緩やかに覚醒させていく。何かが焼ける音が奥から聞こえてきて、急に空腹感を覚える。それは隣の彼も同じらしく、

「今日の朝ごはん何かな」
と呟いている。
持ってきていた小説を開いて読もうと開いたが、いまいち気分が乗らなくてパタリと閉じた。布製のブックカバーに施された、名前が思い出せない花の刺繍の縫い目をなぞる。壁際の振り子時計が規則正しく時を刻む音と何かが焼ける音、それと空腹を刺激する良い匂いだけがその場を支配していた。

霧の下を水が流れていく。霧の隙間にかすか見えた水面を走る小舟が不安定に揺れる。
船底に乗せられた荷物の向こうに立って舟を操るのは、カフェで隣にいた彼だ。不明瞭な視界の中で、彼の前の霧は晴れているのではないかと疑うほどに迷いなく舟をすすめていく。
この町をいくつかに分断しているのがこの水路なら、分断された街をつなぐのもこの水路である。人工的に作られたこの水路の奥底には、今も古く栄えた都市が眠っているという……長く続く中で水に沈んだ都市の上につくられたのがこの町、というわけらしい。本当のところはわからないが。
小舟は立ち並ぶ石造りの建物の間を縫うようにすすんでいく。あちらこちらの窓から漏れる光が、薄暗く白色に塗られた街を彩っていて、眠ったままのような静けさに命を感じさせた。
赤いレインコートのフードを風にはためかせる彼は、時折すれ違う他の小舟を操る船頭と一言二言、言葉を交わしてはグイと櫂を押す。
「そういえば、今日は雨降りませんね」
時刻はそろそろ昼にさしかかろうとしているはずで、いつもならこの時間には立ち込める霧に変わって雨が降っているものなのだが、今日に限って降り出しそうな気配もなく、いまだ白い霧が街に漂っていた。珍しい、

と呟く声が聞こえて上空を見上げていた視線を前方に戻す。
「いつもなら、この時間には雨降ってるのにね。昨日の夜に降ったからかなぁ」
「そうかもしれませんね……昨日はほぼ一日中降ってましたし」
言葉を交わすその視線の向こうには小さな石造りの橋がある。ちょうど子供が駆けてきて、彼が舟の速度を少し落とす。パシャンと水たまりを踏んだらしい音がして、散った飛沫が水面を揺らした。子供が走り去るのを見届けた彼は再び櫂を押す。
速度を取り戻した舟が、水面に広がる波紋の上を滑っていく。橋の下を通り過ぎて、水路を左に曲がる。狭い路地に入っていく。
「こっちが近道なんだ」
と櫂を右に左に動かしてバランスをとりながら彼は言った。先程の水路ではちらほらとすれ違っていた他の小舟もこの路地までは入ってこないらしく、一隻のこの舟が立てる物音以外は、しんと静まり返っていた。
そんな静けさに、不意に彼が唄い始める。彼の舟に乗る度に幾度となく聞いてきた唄。霧の中に流れる唄声はさして大きくはなかったが、細い路地の壁に反響して辺りに響き渡り、心地よく鼓膜を揺らす。ふと建物の方へ目を向けると、窓の向こうで黒い人影が、拍に合わせて身体を揺らしているのが見えた。

「ほら、あとちょっとで着くよ」
声をかけられて瞼を開ける。いつの間にか眠っていたらしい。顔を上げると、櫂を動かす手を休めてこちらを振り向いた彼が微笑んでいる。水の流れにゆるゆると押し流されていく舟の軌道を修正しつつ、彼が前方を指さした。

「あそこがベーカーのおれのお得意さんの住んでるところ。ほら、前に話した、天気予報がよく当たる人」
彼の指先が示す先に目を凝らすと、他の建物と同様、石造りの家がある。二階建ての大きそうな家だ。続いて、その家をさしていた指をすっと手前のほうにずらす。
「で、あっちの桟橋に舟を着けるから、あそこで降りるよ」
幾分か薄くなった霧の向こうにある桟橋には、沢山の小舟が着けられている。今、舟が浮かんでいる水路の先を目で辿ると、桟橋のあるそこに行き着いた。いくつかの水路が流れ込む場所であるそこはひらけた円形になっていて、さながら広場のようであった。
櫂を持ち直した彼が、再び漕ぎ始める。さっき眠り込んでしまう前よりも少し早めの速度で景色が流れていく。

桟橋の杭にロープをかけて、舟を固定した彼が舟に積んでいた荷物を桟橋に運び出していく。最後に桟橋に降り立った彼は、小さなものから少し大きめのものまであるそれらを、ひとつの鞄にまとめて背負う。一見すると重そうなのだが、彼は慣れているのか軽々と背負って、ふらつきもしない。
「それじゃあ、ここからは別行動かな」
彼がそう言って街を一瞥する。
「次は三日後に舟出すからね」
「分かりました。じゃあ、それまで少しさよならですね」
「うん。……あ、ここにいる間はさっきのお得意さんの家に泊まってるから、何か困ったらそこに来て。場所が分からなかったら、人に聞けば教えてくれると思うよ」
「彼、ちょっとした有名人だから」と笑って、お得意さんの名前を口にする。それじゃあね、彼が軽い足取りで

桟橋を駆けるように去っていくのを見送ってから歩き出す。何かもわからない探しモノ。まずは自分がなにをさがしているのか、そこからさがせばいいか。呟いて、白い霧に包まれた街へと一歩踏み出した。

END?

ストレイ・シープ

ラピラ

朝、カーテンの隙間から差し込む淡く優しい光。
けれどもその光は私にとってまぶしく、光を嫌う悪魔や食屍鬼(しょくしき)のように私はベッドの上で光から逃げるようにごろりと寝返りをする。

おはよう。

寝返りをした視線の先にうとうとと微睡(まどろ)むそれは、私をひとしきり見つめた後その小さな瞼を閉じ、寝始める。
この時間が長く続けばいい。私は、眠気に負け重い瞼を閉じた。

『君に　れか　ことを君　う。
がど　か君　だ。　に　よ』

嫌な、夢を見た。
近くにあった時計をみるともう昼の時間になっていた。
鉛のように重い体を動かし、手を使って起き上がる。

優しかった光は鋭く刺すような光に変わってしまった。
私は横目で眠ってばかりの夢の住人を見ながら、
「おまえがうらやましいわ。」
と、朝の挨拶をした夢の住人に言うが、夢の住人はその小さな瞼を少し開け、また閉じた。

私は外に出て夢の住人と湖がある丘への道をゆっくりゆっくりと歩いてゆく。
夜の冷たさが残るコンクリートの地面には幾つもの人型の影が絶えず動いている。
私は忌ま忌ましげにそれを睨み付け、空を見上げる。
「あ、雲。あの雲羊みたい。」
私は夢の住人を持ち上げて抱きしめ、空を指さす。
「ねぇ、お前はどの雲が好き?」
夢の住人に聞いても雲よりも雲を指さした手の方に気を取られ、ぺしぺしと私の手を叩く。私の手はねこじゃらしじゃないのよ。
私は夢の住人の瞳を見つめ、
「お前はドリームランドに行けるのよね。私も行ってみたいわ。ウルタールへ行ったら私もお前のように美しい毛皮を付けてもらうの。この美しくもない黒い髪と変えてもらうの。」
夢の住人はパチパチと瞬きをした後私の話なんぞ興味がないと言わんばかりに大きな欠伸を一つした。
「お前は私の話に興味が無いのね……。そんなに大きな耳がついているのだから少しは耳ぐらいこちらに向けてくれたっていいじゃない。」

それでも夢の住人は振り向かない。
「……もしかして名前がないから呼んでいる事に気づいてないの？」
夢の住人はその言葉に反応してか、ニャーと鳴き、初めて私の目をじいっと見た。
その瞳は青く、雄大な蒼い蒼い海を連想させる。
「そうね……お前の名前……ストレイ……ストレイキャット。迷える猫なんてどうかしら。」
「ニャー……。」
「言っておくけど反論は認めないわよ。」
「……。」
迷える猫は私が名付けた名が気に入らないと言った様子で尾を鞭のようにしならせ、ぺちぺちと私の体に叩きつけてくる。
こいつ。猫のくせに人間みたいだわ。
「別に捨ててもいいのよ。その名前。また他の誰かに新しい名前でも付けてもらえばいいわ。」
私のふてくされたような物言いに迷える猫は尾を叩きつけるのをやめる。

湖の見える丘についた。ゆっくりゆっくり。と別れを惜しむように歩いたので、　真上にあった太陽は傾き、辺りは暗くなってきている。
「迷える猫」
私はそう呼びながら近くにある切り株に座る。迷える猫は自分の座る切り株が無かったのか私の膝上に座る。
私は椅子じゃないのよ。

「私がドリームランドへ行きたいと言ったら迷える猫はその願いを叶えてくれる？」
私は迷える猫を撫でながら言う。
『本当に、ドリームランドへ行きたいのかい？』
迷える猫は私に判る言葉で話す。
「ええ。……話せる気分になった？」
『そうだね。』
「それだったら私の言葉に反応してくれてもいいじゃない。」
『うん？反応したじゃないか。』
「違うわよ！さっきの雲の話をした時よ！」
『んー……そんな話したっけ？』
「したわよ！」
『ごめんごめん。最近物忘れが酷くてさ。』
「嘘つき。この前私が言った言葉を一言一句違わずに私に言ったじゃない。しかも嫌味っぽく！」
『忘れてしまったよそんなこと。』
「嘘つき。」
『ほめ言葉として受け取っておくよ。じゃ、本題に戻ろっか。』
「……。」
『念のためもう一度確認するけど、本当ドリームランドへ行きたいのかい？』
迷える猫は私の目をじっと見る。
「くどいわ。迷える猫。私はドリームランドへ行きたいの。アイツに会わなければいけないの。」

『……そうか。わかった。』
「ありがとう迷える猫。それじゃあドリームランドへ……」
『ちょっとまった。その前にドリームランドへ行く準備をしよう。』
「準備って……どんな？」
『名前さ。君の名前を決めよう。』
「名前って……私には××××って名前があるわ。」
『その名前を呼んでくれる奴はもうみんな“影”になっちゃっただろ？』
「そう……だけど……。」
『折角の夢だ！別人になった気分で行こうじゃないか！』
迷える猫はとても嬉しそうに言う。そしてペラペラと早口で、
『で、まあ、君の名前なんだけど君が僕に付けてくれた迷える猫とお揃いにしたいということと、今からドリームランドに迷い込む君。迷い人じゃ味気なくてつまらないから、ストレイ・シープ。迷える羊でどうかな？』
「そんなの嫌に――」
『あ、言っておくけど反論は認めないよ？』
私が、迷える猫がつけた名前に反論しようとすると私の言葉を予測していたかのように言う。
やっぱり嘘つきだわ。覚えてるじゃない。私が言ったこと。
迷える猫はわざとらしく不思議そうな顔をして、
『どうしたんだい？面白い顔しちゃってさ。』
「……わざとでしょ。迷える猫。」
私が迷える猫を睨むと迷える猫は大げさな驚き方をする。

『おお！怖い怖い。僕はいいと思うんだけどな迷える羊って名前！』
「ねえ、迷える羊って名前なの……？」
『それだったら君が僕に付けた迷える猫って名前が名前じゃなくなるけど？そもそも名前って人や物を区別するために付けるものだからね！』
「わかった。わかったわ。私の負け。その名前でいいわ。」
『納得してもらえたようで何より。』
迷える猫はにっこりと口角を上げる。
『迷える羊。準備はいいかい？』
「いつでもいいわ。迷える猫。」

言い合いをしている間に夜が更けていた。
月が私と迷える猫の真上に出ている。
「それで、迷える猫。」
『なんだい？迷える羊。』
「ドリームランドにはどうやっていくの？」
『ああ、それはね、月へと跳躍するんだ。』
「月！？無理よそんなの！」
『知ってるさ。月へ飛ぶというより、月へ飛び込むの方がわかりやすいかな。』
「どっちにしろ月まで遠すぎるわ！そんなに待ってられない！」

『まあ要は月へ飛び込めればなんだっていいのさ。ほら、湖を見なよ。月が映っているだろう？後は飛び込むだけさ。』
「濡れちゃうじゃない……」
『先に行っておくよ早くおいで迷える羊。』
迷える猫は湖に浮かぶオオオニバスの葉の上をピョンピョンと軽やかに飛んでそのまま月に飛び込んだ。
『う、嘘……本当に飛び込んじゃった。』
迷える羊はおそるおそるオオオニバスの葉に乗る。だが――。
オオオニバスの葉は迷える羊の体重に耐え切れないようで少しづつ沈んで行く。
「あああ！もう！もしこれでドリームランドへ行けなかったら一生恨むわあの猫！」
こうなったらもう自棄だ。
迷える羊はオオオニバスの葉の上を飛ぶ。
そして、月へと飛び込んだ。

END

あとがき

☆

はじめまして、午前二時前と申します。あとがきって何を書けばいいんだろう、そもそも書く必要はあるのか？と思いながらも、やはり挨拶はせねばとこれを書いております。拙い文章ですがよろしければお付き合いくださいませ。

さて、この度は文芸同好会部誌「櫻」を手に取っていただき、誠にありがとうございます。内容のほうは如何程でしたでしょうか、ひとりでも多くの方に面白かったと感じていただければ嬉しい限りです。

本編を読んで「なんじゃこりゃ、意味がわからん……解説はどこだ！」と思った方もいるかとおもいますが、敢えて私の口から物語の指すところは語らないでおきます。あれを読んでなにを思い浮かべるか、それはあなた次第です(実は自分でも説明できないとか言えない)。でも元ネタやらなんやらは書いておきます。

まず「雨上がり」。これははるまきごはんさんの「八月のレイニー」という曲が元ネタです。こねくり回している間に原型を止めなくなってしまったので、曲とは違う感じになってます、たぶん。

二つ目の「記憶を失った青年が脱出するだけの話」。最初はクトゥルフＴＲＰＧチックでオカルティックな話にしよう、そう考えていたはずがあんなことに…。「脱出してないじゃないか」という声が聞こえてきそうですが、確かにそのとおりなので反論できない、かもしれない。

最後の「水面に浮かぶ」には、わかる人にはわかるかもしれないオマージュをや小ネタを散りばめてみました。ちなみに、ドビュッシーの「月の光」を聴きながら書きました。いいですよね、ドビュッシー。

あまり長く喋ってもいらないことを書いてしまいそうですので、私のあとがきはここで終わらせていただき

ます。ここまで読んでくださりありがとうございました。

☆

どうも、初めまして。副部長のラピラです。最後まで読んでくれた方、ありがとうございます。少しでも読んでくれたあなたの心を楽しませることができたのなら幸いです。

それでは解説をしていきましょう。今回書いた「ストレイ・シープ」と言うお話。続きがあるかもしれないので詳しくは言えませんが、ある女の子がとある猫とドリームランドへ行ってあれやこれやするお話です。作中に出てくるドリームランドと言う言葉はある TRPG をしている方ならお分かりになると思いますが、知らない方は何のこと?といった感じでしょう。ドリームランドとは、その言葉のままで夢の国、眠っているときやあることをすると行ける国です。解説はこんなところですかね。

長くなりましたがここまで読んでくださってありがとうございました。これであとがきを終わらせていただきます。

◇著作者

山陽女学園高等部　一年生　午前二時前（部長）

同　一年生　ラピラ

◇表紙絵

山陽女学園高等部　一年生　午前二時前

山陽女学園文芸同好会誌　通算二十四号

櫻

二〇一六　秋号

平成二十八年十一月三日　発行

著作者・発行者

山陽女学園高等部
文芸同好会